

富岡 諭

1. 目的性従属疑問文とは

日本語、韓国語には、(1)/(2)の例文に見られるように、従属疑問文が通常では疑問文を選択しない動詞とでも共起する場合がある。

- (1) 書き間違いがないか、太郎はその論文をもう一度読み直した。
 (2) 辛さがどんな具合か、そのカレーを味見して下さい。

どの言語においても、「たずねる」「知っている」「予測する」などの動詞は、疑問文を項として意味論的に選択するが、(1)/(2)の例文の動詞はこうしたタイプのものではなく、従属疑問文の存在を標準的な意味論的選択の範囲内で把握することは難しい。しかし、(1)/(2)の例文の従属疑問文と主文との関係が「主文の行為は従属疑問文の答えを知るためにされる／された」という性質に限られることから、主文の述部と従属疑問文の間には、何らかの意味論的関係があると推測される。この種の従属疑問文（目的性従属疑問文と呼ぶ）に関して、日本語、韓国語の伝統文法、及び生成文法においてはこれまで言及されたことがなく、また言語類型学的に見ても稀な構造であるようだ。実際に(1)/(2)を英語に直訳すると非文になってしまう。

- (3) *Taro read the paper one more time, whether it contained any typos.
 (4) *Please taste the curry, how spicy it is.

今回の発表では、目的性従属疑問文が、どのような条件下で派生するのかを形式意味論的に考察し、語彙レベルを超えた意味論的選択の可能性を提案する。

2. 目的性従属疑問文が共起できる条件

まずどのような述語、述部がこのタイプの従属疑問文と共起できるかを見てみると、以下に挙げるカテゴリーに分けることができる。(I) 動詞レベルで容易に共起できるもの¹（例：探す、覗く、複合動詞V+てみる）、(II) ある種の副詞句（例：もう一度、注意深く、一つ一つ）を加えたり、「耳をすます・そばだてる」などの常套句の使用により、動詞句のレベルで容認され得るもの、(III) 容認度が落ちるものの非文とまでは言えないもの（例：走る、書く、壊す、読む）、(IV) 容認度が非常に低くほぼ非文と思われるもの（例：生まれる、転ぶ、落ちる、死ぬ）、の四種類である。以下に、それぞれのカテゴリーの例文を挙げておく。

¹ このカテゴリーには「調べる」「チェックする」のように、疑問文を項として選択できるが「を」格の名詞句と同時に疑問文が現れるものも含む。英語でも、この種の動詞は疑問文を項として選択するが、日本語とは異なり目的語の名詞句とは共起できない。

- (i) a. マリが今どこに住んでいるか、調べた。
 b. マリが今どこに住んでいるか、卒業生名簿を調べた。
 (ii) a. I checked where Mary lives now.
 b. *I checked the list, where Mary lives now.

(ib)は、「マリが今どこに住んでいるかを知るために、卒業生名簿を調べた」という解釈になることから、目的性従属疑問文の例とする。

- (5) 子供がもう寝たか、部屋をそっと覗いた。
 (6) 金目のものがないか、泥棒はタンスの引き出しを一つ一つ全部開けた。
 (7) ??辛さがどんな具合か、そのカレーを食べて下さい。
 (8) *人生とは何か、お釈迦様は生まれた。

こうした段階的な容認度は、「～知るために」という意味の構造が音には現れない形で LF 構造に存在するという分析では説明できない。「～知るために」という表現を付け加えると、ほとんど全ての動詞・動詞句で従属疑問文を取ることが可能だからである。(8)を例にとってみると、

- (9) 人生とは何かを知るために、お釈迦様は生まれた。

で明らかのように、「～知るために」を加えることで容認度が非常に上がる。仮に目的性従属疑問文には、「～知るために」と同じ意味を持つ音には現れない空項があるとすれば、(8)と(9)との差異が簡単には説明できない。これ以外にも、目的性を持つ空項を使った分析には様々な問題がある。例えば、目的性だけでなく、「知る」、「確かめる」に近い意味の動詞の部分も空項として存在しなければならないが、そのように特殊化した空項や省略のシステムを正当化するのは難しい。

LF 構造に目的性を持つ空項が存在するという仮説の対極として、主文の述部と従属疑問文との間の関係は意味論的なものでなく、単に語用論的に導かれたものであるという考え方があり、目的性従属疑問文の分析として考慮に値すると考えられるが、その背景として、まず助詞の「と」の役割について見てみよう。例文の(1)は従属疑問文の後に「と」を加えても意味にそれほど変化がない。

- (1') 書き間違いがないかと、太郎はその論文をもう一度読み直した。

「と」を隠れた引用文の存在の示唆と捉え、目的性従属疑問文には「～と言いながら・思いながら」の意味が足されていると仮定すると、次のような仮説が立てられる：目的性従属疑問文は、主文の動作主がその行為をしている間に自問した質問であり、主文との目的性関係は語用論的に導かれる。しかしながら、例文の(1)では妥当と思えるこの仮説も、種々の問題があり目的性従属疑問文の有効な説明にはなりえない。まず例文の(2)では「と」を入れることができない²。すなわち、すべての目的性従属疑問文に「と」がつけられるとは限らないのである。また韓国語では、目的性従属疑問文に使われる終助詞の形態素 (最も頻繁に見られるのは *-nun-ci*) が、日本語の「と」に当たる *-ko* を使った場合には使えないという形態論的な制約があるため、目的性従属疑問文を *-ko* が省略されたものとする分析はありえない。更に、例文(10)で見られるように、助詞の「と」がついた場合、従属疑問文と主文の述語との関係は目的性を持つ必要はなく、ただ単に動作主が主文の行為中に思い浮かべていた疑問であっても良いが、「と」がない場合はそうした解釈の自由はない。その為、例文(10)の場合、「と」がないと、あたかも「今日は何をしようか」の問いに対する答えを見つける為に、駅に歩いていった、という語用論的に不適切な解釈になってしまうのである。

- (10) 今日は何をしようか#(と)、駅の方へぶらぶら歩いて行ったら、友達に会った。

こうした状況を考慮すると、目的性を語用論的に導き出すと言う仮説が、目的性従属疑問文の分析には適切でないことは明らかである。

² 基本的に命令文、依頼文が主文となる目的性従属疑問文には「と」がつけられない。これは、命令文、依頼文の主語が聞き手であり、「と」をつけると、話者が聞き手の思いを引用するという語用論的に不適切な状況になるからだと思う。

3. 目的性の発生とその分析: 句レベルの意味論的選択

これまでの観察を総括してみると、目的性従属疑問文が標準的な統語論、意味論、語用論の枠組みにうまく当てはまらないことがわかる。目的性従属疑問文と共起する主文の述語は、質問を意味論的に選択すると考えられている述語ではないが、疑問文と述語の間には何らかの意味論的関係或いは制約がある。それを目的性の意味を持った空項や、語用論的演繹では説明できないとなれば、意味論的選択の領域を標準的に理解されているよりも広義に解釈するという可能性を模索する意義は大きいと思われる。その第一歩として、目的性の性質について考えてみよう。動作主が行う行為、いわゆる **agentive activities** では、動作主が何らかの目的を持って行うことが一般的である³。例えば、「食べる」という行為には「空腹を満たす」、「栄養を摂取する」などの目的が容易に想像できる。それに対し、「落ちる」「生まれる」などの動詞は、動作主が自的に行う行為ではなく、目的の存在が希薄である。上記の従属疑問文と共起的できる述語の範疇では、後者はほとんど非文に近い程容認度が低いタイプに属するが、これは目的性のなさが起因していると考えられる。「食べる」などの動詞は、これらに比べれば容認度は高いが文法的なものとするにはかなり無理がある。つまり、目的性の存在は必要であるが、どんな目的でも良いというわけではなく、以下の条件を満たしていなければならない。

- (11) 目的性従属疑問文は、「新しい情報を得る」という目的の存在が動詞句レベルで含意されているものとのみ共起できる。

(11)で注目すべきは、目的性が LF 構造での空項の存在や語用論的演繹からではなく、主文の述部の意味に起因しているという点である。ここで「動詞句レベル」とあえて言及したのは、前述の通り「注意深く」「もう一度」「一つ一つ」などの副詞表現が、「読む」「食べる」など、動詞だけでは目的性従属疑問文が共起しにくいものも容認度を上げる効果があるからである。(11)の一般化と目的性従属疑問文との関連を明らかにするには、「新しい情報を得る」ということの語用論的意味を考察する必要がある。新しい情報という概念は、Stalnaker (1978)の流れをくむ形式語用論 (Roberts 1996 など) において「会話コンテキストで会話参加者が共有している質問、いわゆる Question under Discussion (QUD) に対する答え」と定義されている。即ち、新しい情報を得るという目的の存在は、その情報に相当する命題を答えとする質問の存在を含意していると解釈できることになる。その含意を、Nissenbaum (2005) の目的論的モダリティ (Teleological Modality) の概念を使った目的節 (rationale clause) の分析を基に、「食べてみる(taste)」という例を使って表記してみたものが(12)である。(注: $\text{Dox}_{y,w'}$ は個人 y が可能性世界 w' において信じている命題全てが真である世界の集合を指す。)

- (12) $\llbracket \text{食べてみる} \rrbracket = \lambda w. \lambda x. \lambda y. \lambda e. \text{taste}(e)(w) \ \& \ \text{theme}(x)(e)(w) \ \& \ \text{agent}(y)(e)(w) \ \& \ \exists Q_{\langle \langle s, t \rangle, \langle t, \rangle \rangle} \forall w' \text{ such that } w' \text{ is compatible with the goals relevant to } e \text{ in } w, \exists p [p \in Q \ \& \ \text{Dox}_{y,w'} \subseteq p]$

³ 目的性は、大抵の場合主文の動作主の目的であるが、そうでない場合もある。例えば (i) のようなケースである。

- (i) 昨日うちの犬は、狂犬病にかかっていないか、病院で検査を受けた。

狂犬病にかかっていないか確かめようとしたのは、飼い主である話者と考えるのが適切である。これについては、仮に「知るために・確かめるために」という表現を使っても状況は同じであることから、従属疑問文に限った現象ではなく、目的節及びそれに相応する表現一般に見られるものと思われる。英語の **rationale clause** でも類似した解釈が可能であるようだ。

- (ii) Our dog took a series of tests yesterday to find out whether his liver was functioning normally.

(12)の一行目は、「食べてみる」の標準的な意味である。それに対し、下線部は含意されている目的性を「食べてみる」の意味の一部として加えたものであり、そこでは新しい情報を得るという目的の存在が、その新しい情報が答えと成り得る質問の存在と置き換えられている。このプロセスは、含意されている意味を「暗に示唆されている」というレベルから、「意味論的に明確に示されている」というレベルに上げるものであり、一般的に *enrichment* と言われる過程に近い。

更に、(12)で存在数量詞化されている質問 ($\exists Q_{\langle s, t, p \rangle}$) を、McConnell-Ginet (1982) の副詞句の分析、Dekker (1992) の存在的解放 (Existential Disclosure) の概念をベースにして、存在数量詞 \square を取り払い、自由変数になった Q をラムダ演算子で束縛するシステムを提案する。その結果が(13)である。

- (13) $\llbracket \text{食べてみる} \rrbracket = \lambda w. \lambda x. \lambda Q_{\langle s, t, p \rangle}. \lambda y. \lambda e. \text{taste}(e)(w) \ \& \ \text{theme}(x)(e)(w) \ \& \ \text{agent}(y)(e)(w) \ \& \ \forall w'$
such that w' is compatible with the goals relevant to e in w , $\exists p [p \in Q \ \& \ \text{Dox}_{y, w'} \subseteq p]$.

(12)と(13)のプロセスを経て、目的性従属疑問文は目的性を加えられた動詞句により意味論的に選択されるという形になる。

本分析では、前述の動詞句のタイプによる目的性従属疑問文の段階的な容認度が説明できる。目的性従属疑問文と共起できるかは、新しい情報を得るという目的性が、主文の解釈に際しどれだけ容易に想像できるかと関連するからである。まず、目的性が希薄な「転ぶ」などの動詞では共起できず、目的性はあっても「新しい情報を得る」を言う性質が明らかでない場合は容認度が低い。また(13)は動詞句レベルで起こりうるため、「もう一度/注意深く/一つ一つ」などの副詞句や、「耳をすませる・そばだてる」などの常套句が、情報を得るという目的性を想起させる助けになっていることも説明できる。

4. 目的性従属疑問文の統語構造

次に本分析が統語構造へどのようなインパクトを持つかに関して考察してみる。目的性従属疑問文は元々からある項ではなく、後から付け加えられるタイプの項であることから、いわゆる充当態の項 (*applicative argument*) の一種とみなすという仮説も可能である。これまでに疑問文の形を持つ充当態構造の可能性は試みられたことはないが、充当態構造が言語類型学的に多様であり、中には限られた言語にのみ存在する充当態構造もあることを考慮すると、目的性従属疑問文を充当態構造として具現化できる言語が存在すること、しかしそうした言語がどちらかといえば稀であることという事実は少なくとも予想可能である。ただし、目的性従属疑問文と充当態はある重要な点で異なっている。充当態の項は、元々からある項ではないとはいえ、一旦具現化されれば他の項と統語的に同じパターンを取ることが多い。例えば、バンツー諸語における充当態の項は、一般的な項と同じように受動文での主語になりうる (Baker 1988 参照)。日本語の目的性従属疑問文はどうかといえば、統語的には意味論的に選択された項ではなく、付加詞的なパターンを取るようだ。例えば、従属文から主文へのかきまぜは、項では問題がないが、目的性従属疑問文は非常に難しい。これは、例えば「愚かにも」といった副詞句が従属文から主文へ移動しづらいのと酷似している。

- (14) [その花束を]₁、マリは秀樹が t_1 自分のために買ったと思っている。
(15) ?*[タイポがないか]₁、マリは秀樹が t_1 その論文を何度も読み返したと思っている。
(16) [愚かにも]₁ マリは秀樹が $*t_1$ ユカに告白したと思っている。

(16)ではマリが愚かであるという解釈はできるが、秀樹が愚かだという意味は取れない。これは「愚かにも」が、従属文から主文へとはかき交ぜ移動ができないことを示唆している。また、従属疑問文から主文へのかき交ぜを見ても、目的性従属疑問文は項よりは付加詞の性質を持っている。(17)で見られるように、選択された従属疑問文から主文へのかき交ぜの移動は文法的である

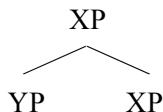
が、目的性従属疑問文からの主文への移動は容認度があまり高くない。(18)はその例であるが、(19)の理由節のような付加節からの移動と容認度が同程度、すなわち完全な非文ではないが文法的とは言えないレベルにあるようだ。

- (17) [その部屋に]₁、警察は、[誰が、_{t₁} 残っていたか] 知りたがっている。
 (18) ??[その部屋に]₁、警察は、[誰か、_{t₁} 残っているかどうか]、監視カメラを覗いてみた。
 (19) ??[その部屋に]₁、警察は、[その容疑者が、_{t₁} 残っていたので]、すぐに尋問した。

このほか、格助詞の分布を見ても目的性従属疑問文は一般的な項とは異なるパターンを見せる。Fukui (1986) で観察されているように、日本語の従属疑問文には選択する動詞により「を、に、が」などの格助詞を付加できるが、目的性従属疑問文では格助詞はいっさい現れない。この制約は韓国語においても全く同じである。韓国語では、日本語の「を」格とは異なり、多重目的語構造が頻繁に使用されるが (Mailing and Kim 1992 他参照)、それでも目的性従属疑問文に日本語の「を」に相当する *-lul* を付加することはできない。

語彙レベルよりも後発の選択の対象となる目的性従属疑問文が、選択された項であるにもかかわらず統語構造では付加節的な背質を保つ理由は何であろうか？ 句レベルでの意味論的選択は Marantz (1984) における外項 (external argument) の分析以降あまり顧みられることがなかった。現在では、外項を小動詞 (small *v*) あるいはヴォイス (Voice) の項とする分析が主流になりつつある。目的性従属疑問文の分析には、こうした機能範疇は関連しておらず、本来の意味での句レベルの意味論的選択を再生する必要がある。句レベルの意味論的選択が存在するとして、尚且つ選択するものとされるものは構造的に姉妹関係 (sisterhood) にあると仮定すれば、その結果は (20) のような構造になる。

- (20) XP が YP を選択する場合



この構造はいわゆる XP 付加節の構造と全く同一である。つまり、句レベルの意味論的選択というプロセスは、選択された項が統語構造では付加節として現れるという常識的には相反する状況を生み出す結果になり、目的性従属疑問文がかき交ぜ移動や格助詞との非共起性といった点において付加節的な様相を見せることが正しく予測できる。

5. 総括：言語類型的視点から

本発表では、目的性従属疑問文というこれまでに顧みられなかった現象を分析し、語彙レベルを超えた意味論的選択の必要性を主張した。具体的には次のようなプロセスを提案した。

- (21) a. 述部の意味に包含される目的性を意味構造に具現化する。新たに加えられた意味には存在数量詞化された質問が含まれる。
 b. その質問の意味の存在数量化を抹消し、自由変数になった質問の意味をラムダ演算子で束縛する。
 c. 動詞句のレベルで選択された目的性従属疑問文は、付加節として統語構造に現れる。

これにより、日本語、及び韓国語における目的性従属疑問文の存在が説明できるが、この構文が言語類型的には稀であるという事実をいかにして導き出すかという疑問が残る。(21abc) の中で有標性が非常に高い過程があり、それが言語類型的希少性に繋がっているというのが現時点での推測であるが、検証するまでには至っておらず、今後の研究の課題としたい。

参考文献：

- Baker, Mark. (1988) *Incorporation*, University of Chicago Press.
- Dekker, Paul. (1993) 'Existential disclosure,' *Linguistics and Philosophy*:16, pp 561-587.
- Fukui, Naoki. (1986) *A Theory of Category Projection and its Application*, Doctoral Dissertation, MIT.
- Marantz, Alec. (1984) *On the Nature of Grammatical Relations*, MIT Press.
- Maling, Joan, and Soowon Kim. (1992) 'Case assignment in the Inalienable Possession Construction in Korean,' *Journal of East Asian Linguistics* 1: pp.37-68.
- McConnell-Ginet, Sally. (1982) 'Adverbs and logical form: A linguistically realistic theory,' *Language* 58, 144-184.
- Nissenbaum, John. (2005) 'Kissing Pedro Martinez: (Existential) anankastic conditional and rationale clauses,' *Proceedings of SALT XV*, pp. 134-151.
- Roberts, Craige (1996) 'Information Structure: Towards an integrated formal theory of pragmatics,' *OSUWPL Volume 49: Papers in Semantics*.
- Stalnaker, Robert. (1978) 'Assertion,' in P. Cole (ed.) *Pragmatics*, New York: Academic Press, 315-332.